

心と体の統一は何を意味するのか？

デビット バートン  
研究室長および化学科助教授  
ブリッジポート大学  
アメリカ合衆国コネチカット州ブリッジポート

## 1. 序論

どんな世界観にとっても根本的なものが存在論である。その存在論は根本的な仮定とそれに続く思考のすべてを形成する存在の理解を具体化する。西洋では、宗教的意識はキリスト教の存在論によって形成されてきた。我々の用いる言語でさえその意識によって形成されてきた。英語において、宗教的概念に関連する我々の言語は、信仰を持たない人にとってさえ、“古典神学の唯神論 ("classical theological theism" (CPT))” (参考文献1) として広く分類されうるキリスト教の教理に由来する。古典哲学の唯神論の存在論はそれ自体大部分においてギリシャ哲学、とりわけプラトーンとアリストテレス (参考文献2) の哲学に由来する。この古典的観点において、霊 (spirit) と心 (mind) は実質的に同義語であり、完全に無形ではあるが、物質とは別の実体と見なされる。この観点において、人類は心と体の二元論として存在する。さらに、神は霊であり、概して我々は霊と物質存在の二元論を宇宙における分立された実体として理解する。フィリップ・クレイトンは言う

古典神学の唯神論にとってはすべてのものが実体か実体の属性であり、一つの実体がどこにあらうとも他の実体は同時に存在することができないことを思い出しなさい。このように、神は世界を創造する際に二つの選択肢のみを持っていた。神は世界を神がそれらの実体として持つような属性 (または“偶有性”) のひとそろいとして創造することができた。—しかしそうすると世界は神の明示としてだけ存在するだろう。そしてそれは (汎神論的観点における神の世界に対する関係のように) 神以外に主観的実体が存在する余地を残さなかつただろう。いや、神は実際に存在する実体の世界を創造することができた。—しかしそうすれば神の実体の外に存在しなければならない。それゆえに、その場所の“中に”有限の実体の領域がその存在を有する神の外に“空間”がなければ

ならない。以前の世紀においては、空間（と時間）は、— “その中に” 事象や対象がおかれうる大きな箱のようなものである— 対象的な枠組みとして理解されていたので、この箱をどこかに創造しその中に入れるために無からひとままりの実体を創造する神には何の問題もないように見えた。これによって、古典神学の唯神論の創造の物語、つまり今日の神学者により広く推測された創造の物語がある。（参考文献3）

その一方、物質と物質的宇宙にたいする現代の見解は科学に由来する。科学は古典哲学の唯神論が包括する時空の静的見解とは一致しないように連続的に発展する動的宇宙を我々に示す。さらに、科学は実体に対する古典の見解が間違っていることを示す。量子力学に基づいた素粒子物理学の標準モデルは、物質とエネルギーが離散的であり連続的ではないことを指摘する。原子は電子雲に囲まれた陽子と中性子からなる核の混合粒子である。異なる元素は自然に存在する81の安定元素による異なるタイプの原子により特徴づけられる。より大きな分子と固体物質は原子の集合体である。物質は古典哲学の唯心論やギリシア哲学が要求するような方法で実体として存在するのではなく、我々は実存の記述を拒否することを強いられる。再び、クレイトンは言う

我々の世界を思い描く常識的方法はとつくの昔に **substantivalist** の言い方との接触を全く失った。そして哲学者は議論を解決するための重要な手段として常識的方法をもはや求めない。それにもかかわらず、古典神学の唯神論はそれを無意識に仮定する信条の中に制度化されて以来、神学におけるその影響は重大であり続ける。（参考文献4）

クレイトンは古典哲学の唯心論が今日主要な危機に直面していることを続けて指摘する。彼はこのことに対してのいくつかの理由をあげる。しかし、とりわけ重要なことは、彼が古典哲学の唯心論を物理的に間違っていると明確に思うことである。自然科学は物質を基礎とした存在に対する哲学的見解には同意しない。科学は存在に対して異なった種類の実在物と時間と空間それ自体に対してのととても異なった概念を明らかに示す。この状況が与えられたとき、科学と宗教（キリスト教）の間の議論にどのようなことがおこるのだろうか？ こ

の種の議論においては、あなたは現代科学の理解を多くとも数世紀の古さで2000年以上の哲学に由来する存在論と対抗させている。何が結論かは瞬時に明白である。つまり、2000年の哲学は現代科学の説明ととても争うことはできない。我々は科学によって投げられた挑戦に答えるためのキリスト教の能力の低下という結果をみる。これは部分的には、科学的論拠を主張しているリチャード・ドーキングの“神の錯覚”、がなぜ大きな影響を与えることができるかの理由である。

必要なものは、再定義された存在論的な枠組と、実在の存在論を前提としない言語で信仰概念を組み立てることができる科学と共存できる専門用語である。統一思想が新しい存在論的な枠組みの根源でありえるというのが私の信念であり、これが私の執筆において指導的役割を果たす。しかしながら、ここに外観される状況からみる統一思想の検討は、李博士が古典哲学の唯心論からの実体の哲学的概念を、この考えを支持する存在論のカテゴリーの中に導入することを明らかにする。さらに、李博士は、より根本的な原理講論のなかのこれらの同じカテゴリーの標示とは全く異なる方法でこれをなす。

最初の章では、それは原相論の章であるが、彼は性相と形状（心と体）および陽と陰（男らしさと女らしさ）の根本的な存在論的カテゴリーの最初の記述を与えているのだが、李博士は博士の説明に対する基本として古典哲学の唯心論の実在の存在論を明確に適用する。このように、伝統的な思想の心/霊と体/物質と同等に、性相と形状は実体となり、陽と陰はこれらの根本的な物質の属性と見なされる。

全ての存在物は人間も含めて性相と形状の統一体である。換言すれば被造物の中において性相と形状は個々の実体の要素である。さらに、性相と形状それ自体はおのおの実体の特性を持ち・・・被造世界において性相と形状は実体の特徴を持つ。その一方陽陰は性相と形状の属性である。（参考文献5）

以前の仕事の中で、私は統一思想の根本的に重要な存在論の概念を古典哲学の影響から分離することを試みてきた。課せられなかった概念の論理は、性相が自然科学とよりよく調和すると私が信じている形状との関係において存在するというモデルを導く（以下の部分を見よ）。そのモデルはまた霊的な存在に対する新しい見方と人間にたいする存在論的構造とを導く。昨年、私はその霊界

を理解するためのそのモデルの分岐構造を議論した。この論文では、心と体の統一を理解することに関連して人間の構造のより詳細を述べるつもりである。

我々の心と体を統一する必要性は文師の講演における共通のテーマである。師はそれを個性完成への道における霊的発展の必須要素と説明する。心と体の統一の必要性を示唆する際に、その意味することは現在のところ人類がその二つの間の分裂の状態であるということである。しかしながら、我々はこの分裂の存在論的状态をどのように理解するべきであろうか。先駆けて行われた議論から、これらの用語の意味の解釈に対してとりわけて注意する必要があることは明確である。信仰的状况において心と体の統一の英語言語学は古典的キリスト教の考えの意味を即座に引き合いに出す。

心と体の二重性の古典的概念を適用するのは魅力的である。というのは、これが比較的直接的で即座の説明を与えるからである。しかしながらこの観点において異なる“空間”を占める二つの実体として心と体との本来の存在論の不連続がある。どのようにそれらが統一されることのできるかを見ることは難しく、統一の仕事は神の共通中心目的の両方に中心の一つとなる。心と体はたとえ共通目的のまわりで統一されたとしても二つの実在として残るであろう。統一思想は性相と形状を実在として取り扱うので、この問題を引き継ぐ。李博士はこれを認識しそれらが神に適用するように幾分この概念を変える。

性相は主に心的要素からなるが、その中にエネルギー要素も含む。同様に、形状はエネルギーからなるが、その中に心的要素も含む。こうして性相と形状は完全に異質ではない。創造の言葉の中で、性相と形状は霊と物質の要素を表す。

この説明はまだ幾分不完全である。なぜなら古典的考えは物理学的に正しくないか科学と調和しないからである。結果として、ここで私はもし我々が以前発展させた存在論モデルからの洞察を用いても良いかどうかみってみる。加えて、我々は墮落の効果を考慮する必要がある。墮落なければ人類が彼らの個性を完成できただろうということを原理講論が物語るからである。それこそが墮落せずに私たちが心と体の統一によって得ることができた物である。それゆえに、我々は何が墮落の存在論的意義かを問いかけることが必要である。(参考文献6)

## 2. 人類の構造

クレイトンは古典的哲学的唯心論を越えるために我々は実体の存在論より個人の存在論からはじめなければならないことを示唆する。彼は言う「聖書物語は人間的な神が人間たちと偶然出くわすことを記述する。」十分興味深いことに、このことは原理講論がその第一章で始まる部分と全く同じである。ここで、神はほぼ本質的には愛の人間的な神であり、神の二面的性質は、それは根本的な存在論的なカテゴリーであるが、人間において最も明確に表現される。すべての他の存在物は人間の構造に由来し、そのため全てのものは共通の構造を持ち、そのためにその共通の構造は神に帰する。クレイトンは言う「人間性の概念を神の理解の基礎と考え、神を我々と類似した人間として考えてみよう。そうして必要なところでそれを訂正せよ。」。これは原理講論の態度と全く同じである。さらに、原理講論における二性性相の存在論は相互作用する粒子のように物理的存在の記述ととりわけてよく一致する。それゆえに、それは古典的哲学の唯心論の存在論に基づいた実在よりも自然科学に一致する。

以前に開発されたモデル（参考文献7）は、ある部分それは存在論の粒子に基づいた理解から始まっているが、原相の二段階構造を拡張し李博士とは全く異なる方法で全ての存在物に適用するために拡張する。李博士は創造された宇宙において存在物の全体像を反映する二段階構造を性相と形状（内的四位基台）の統一された個性真理体および他の存在物と関係する連結体（外的四位基台）として記述した（参考文献8）。しかしながら、私の提案するモデルは二段階構造を性相それ自体が構造を持ちその構造が内的基台を含むものであるような存在物に直接的に適用する。李博士の構造と対照的に、このモデルは原相に見いだされるように内的および外的基台の間の相対的な関係を保つ。

このモデルによれば、性相と形状は二つの別の実在ではなく、分離することのできない存在物の二つの様相である。それが、二つの実在ではなく一つの統一された存在として存在する存在物である。性相は存在の情報内容と存在において情報が表現されるメカニズムと関連した内的四位基台として考えられることができる。もっと明確には、我々はこれを心（性相）が内的基台として存在するが体の物質粒子（形状）から分離していない人間に見いだすことができる。このことはまた、細胞レベルや細胞の物質構造において生命の内的基台の中に見られることができる。それは、非生物の“物理-化学的”性質とその原子/分子組織においては明確には認識されていない。個性真理体としての存在物はこの

ように性相と形状の統一された一存在であり、われわれは連結された存在によって意味されるものを再定義しなければならない。

この構造を採用することは存在物を見る二つの見方を導く。第一番目は個性真理体における性相と形状の統一体としてである。この観点は、その中で我々は成り立っている粒子の特徴の合計からだけでは生じない存在の特徴を探している単層的なものである。一方、二番目の方法は、存在物が同時に原子以下の粒子までの多くの階層構造を持った集合体を認識することである。それは、存在物を連結体と呼ぶ統一的な集合体である。これは、関係の見方に対する観点におけるわずかな変化になる。全ての関係はそれゆえに一つの存在と他の独立した存在との関係の観点からよりも関係している粒子のより大きな統一の中に起こる。

最大のスケールにおいて、宇宙はそれ自体個性真理体であり連結体として存在する統一された存在である。個性真理体として宇宙の性相は宇宙意識と同等である。宇宙意識において、統一思想は、宇宙が全体としてそれに親密に関連してある種の心を持つことと、心の宇宙物質との関係は人間における心と体の関係に似ていることを提案する。宇宙を一つの個性真理体として見ることは科学への賞賛である宇宙の理解に対する見方を加える。何かを理解するために、科学はそれを構成のする部分にわけて単純な部分を別々に理解しようとする。このことは絶対的に必要であるが、部分を一緒に戻しもとの全体の協調やそれに誘起される特徴を理解することはうまく取り扱わない。全体がこの単なる足しあわせ以上であることへの理解は個性真理体のこのアイディアにより表現される。

我々はまた自然科学がそうするように階層物質の観点から宇宙を見ることができる。このようにより大きな全体のなかでそれぞれの部分の間の全ての関係が起こるところで連結体として全体として宇宙を認識することができる。個々の関係における観点から、我々は何か他のものとの関係やある存在の外部を見るよりもより大きな部分のなかに全てを置くことができる。私は、この観点の変化は、より大きな全体を維持する為に働く自然淘汰の明確な衝突を見ることができる時、我々の進化の理解に対して重要な結果を持つであろう。結果として、自然淘汰が意味するように発展は衝突から発生せず、協調のより深いレベルから生ずることを見ることができる。

霊界と霊の考慮に対してこのモデルを適用することは、霊の心としての概念を導く（参考文献9）。しかしながらこれは伝統的なキリスト教の實在する心と体の二重性に見いだされる概念に対してはとても異なる心概念である。性相と形状を統一された存在の分離できない様相として扱うことは、物質粒子から分離できないものとして心を概念化することに導く。心の内的基台は体の物質の中に直接的にパターン化される情報の蓄積と検索のパターンにおいて発生する。これを宇宙精神、宇宙意識、に拡張することにより、我々はそれが宇宙それ自体の物質粒子から分離できないだろうことを知る。霊界は宇宙精神の心象となる。分離したものではない。人間の霊はこの宇宙精神の中に存在するだろう、しかし再び、分離した実体ではない。これは人間の構造の特別な概念に導く。

肉体的な自己に対して、この状況は、統一思想に対してその説明においてわずかな差異はあるが、とても単純である。このモデルの中で、肉体的な自己は肉心と肉身の二段階構造として存在する。ここでは、肉心は内的四位基台として存在する。肉心は肉身の物質構造から分離しない。このことは、神経科学が脳の機能化について我々に教えるものと一致する。例えば、神経科学は記憶がシナプスのパターンに存在し、神経のネットワークは知覚過程において働くことを示唆する。換言すれば、神経科学は思考過程（知性、感情、意志）と肉心の記憶は肉体的身体/脳と独立的には働かないことを示す。これらの思考過程/記憶の内容または意味は脳の物質的構造に依存したりそこから働くことは必ずしも必要ではないが、物質的なサポートなしには真意も存在できないだろう（参考文献10）。だから、我々は心の内容を（内的基台として）概念的には肉身から分離することができるが、その内容物は身体の物質にパターン化され、それゆえにからだから存在論的に分離できないことは認識されるべきである。我々は、この内容物を実体と考えることはできない。

霊的自己に対する状況はもっと複雑である。このモデルにおいては、宇宙意識は肉心が肉体と関係するように物理的宇宙と関係する。宇宙意識はそれゆえに宇宙に対しての内的四位基台として存在し、宇宙の粒子から存在論的に分かれてはいない。この観点では、霊界はその内容物、つまり宇宙意識の蓄積や過程の両方、から生じる。宇宙意識の中の個々の霊は原相の中のロゴスと同じ状態を持つ。

ここで有益な類似性はコンピュータゲームであろう。ここではコンピュー

ターが仮想環境の中でキャラクターが動き演じることを作り出す。芸術的知性における最近の仕事は、仮想ゲーム環境で独立して働きプレイヤーと交流する自立したキャラクターの開発に集中している。

芸術的知性 (Artificial Intelligence: AI) が自然な家を探したところの一つがコンピュータゲームの開発においてである。コンピュータゲームの AI は、消費者のより良く、早く、より挑戦的なゲームへの嗜好が育つにつれてますます精巧となっている。ゲームにおいて、AI はあなたが戦う相手のなかや同盟者、または他のチームメンバーの中にしばしば現れる。(参考文献 1 1)

これらの自立的なキャラクターは宇宙精神の中の霊に似ているだろう。そして、物理的宇宙はコンピュータに類似する。他の類似性は夢を見ているときの自己の概念であろう。夢の中で、我々は我々自体が横たわっているのに我々があたかも肉体を持って物理的環境と相互作用しているように動いていると知覚する。それは実際には我々の知覚する心の環境の中で動いている心のイメージである。これは我々の心の環境の中で行動する意識イメージのようなものとしての霊と似ているであろう。それを我々は、宇宙意識の中の霊界と呼ぶ。

肉体的自己は肉身の構造に存在論的には局在する。しかし宇宙意識は全宇宙と存在論的に連結されている。霊的自己はそれゆえに空間のどんな与えられた場所に局在する必要はなく、宇宙精神の中を考えのスピードで潜在的に動くことができる。しかし、これはこのモデルの一つの問題である。このことは、我々が霊的自己と肉的自己の間のある相互作用を仮定しなければならないことである。宇宙精神における遍在的な心のイメージはどのようにして局在した人間の肉心と連結するのであろうか。このことが、我々に存在する統一思想と原理講論の本文の中で良く定義されていないもう一つの部分をもたらす。それは、霊的および肉的自己の関係の部分である。これを考えることにより、我々は科学的なものとの直接的な関係を離れてより神学的な本質へと動いている。しかしながら、それは存在論にとって重要である。

### 3. 霊的自己と肉的自己の関係

統一思想はそれ自体二つの実体として性相と形状を扱い、霊界の現実性を主張しない。結果的に、一般的に心は一つの実体として扱われ、生心と肉身の間



の違いは様相の違いではなく程度の違いである。李博士にとって、生心は人間の心における知性、感情、そして意志のより高次機能性である。

精神は真理、善、美、愛の生活、つまり価値の生活を求める。しかしながら、肉身は食、衣、保護、性の生活、つまり物質的生活を求める。(参考文献1 2)

それゆえに、人間の心の霊的肉的な様相を認知しながらも、彼は心に対してたった一つの実体を示唆し霊的自己と肉的自己の間の関係を直接的には主張しない。代わりに、霊的および肉心の様相の関係を彼が“精神的意識的知覚”(参考文献1 3)と呼ぶ心の内的性相の機能と見なす。

原理講論はこのことについてもう少し言う。ある要素の交換によって媒介される霊的自己と肉的自己の間の関係について述べる。

生心の要求のままに肉身が呼応し、生心が指向する目的に従って、肉身が動くようになれば、肉身は霊人体から生霊要素を受けて善化され、それに従って、肉身は良い生力要素を霊人体に与えることができ、霊人体は善のための正常的な成長をするようになるのである。(参考文献1 4)

生力要素は我々の肉体的な行動により発生し、我々の心は我々の肉身が善行を行ったときに喜びを得ると言われている。その一方、生霊要素は肉体に喜びと病気を克服するなどの強さをもたらす。原理講論はこれに対するさらなる説明は行わず我々は生霊および生力要素の存在論的な本質に対して思いをめぐらす。

ここに提案された人間構造に対して、宇宙意識における霊人体と肉身の関係は局在した肉心と遍在した生心の間関係へと達する。両方は物質と全く関係している。しかし、どのように相互作用が起こるのか、粒子の特別な交換なのかを決定することはとても問題がある。科学と神学のなかでこれを理解するための正確で直接的な指針はない。しかし、我々が模索でき、心と体の統一の議論に対して重要な一つの道がある。これが、人間の墮落という概念である。我々はこのトピックスについて科学からより離れて神学へ入るのだが、統一思想においてかろうじて触れている原理講論の重要な部分がある。

#### 4. 墮落

人類の墮落の概念は一神教に限られる傾向をもつ。そして、哲学的というよりも神学的である。さらに、科学的にはそのような理論を受け入れる証拠となる基礎はない。それに反して、人間の起源の進化論は一般的に墮落の真実性を否定するようである。それにもかかわらず、墮落は統一世界観のより重要な様相の一つであり、それゆえに、より推測的な根拠に移動することなしに存在論的に主張することは重要である。統一思想の大部分において、李博士は墮落とその結果について直接的に扱うことをさける。しかし、歴史論を扱う章においてそれをさけることはできず原理講論の世界観を正当化する。結果的に、李博士は統一歴史観の基本的見解の外観を与える。これは以下の言葉に適切に要約される。

人類始祖の墮落のために、人類は本然の人間と本然の世界を喪失した。したがって、本然の人間は霊的な死の状態に陥った。そして、本然の人間と世界は未完成のまま失われてしまった。そのため神は歴史を通じて人間を再創造し、世界を再建する摂理をなされるようになった。ゆえに摂理歴史は再創造歴史となったのである。(参考文献15)

基本的な外観は世界に対する統一思想的アプローチを支える。それは我々に我々がどこにいて歴史がどの方向に向かうのかを教える。それは我々が墮落として知る事件のゆえに実現しなかった世界と人類の本然の姿を示唆する。それはまたその本然の理想の姿を再創造するという歴史観を含む。統一思想の大部分は本然の姿の記述として考えられることができる。例えば第3章は、“本性論”というタイトルである。我々が墮落した人間の状況の背後の理解の痕跡を見るのは、歴史論、前書き、および多くの哲学的参考文献においてである。

可能な限り墮落の存在論的な内容についてとどまりたくない。というのは墮落を受け入れることは全ての信仰において持たなくても良い観点を受け入れることを必要とすることを悟ったからである。むしろ、人間が墮落からうけた存在論的な結果を認識するかどうか知りたい。その墮落の結果は上に引用された一節において霊的な死として特徴づけられている。統一思想は人類の墮落の結果を扱わないので我々は原理講論を見なければならない。復活論の章において原理講論は述べる

このような事実から見て、墮落によって招来したその死は、肉身の寿命が切れて死ぬことを意味するのではなく、神の善の主管圏から、サタンの主管圏に落ちるという意味での死を言うのであることを、我々は明確に知ることができる。(原理講論 p 212)

それは神からの分離、特に神の愛からの分離によって特徴づけられる墮落である。それは完全な分離ではない。というのは、我々はある神に対する連結にたいしてある基板を未だに持っているからである。しかし、墮落によってサタンとのつながる基準を残す何かを相続している。人間の条件は各々の個体に内在する葛藤によって特徴づけられる。そして、我々が見る闘争歴史は個体の闘争の拡大である。しかしより関心のある本論文の目的に対しては、人間の構造のどこにこの葛藤が残るのだろうか？ このことが心と体の分裂の経験が起こるポイントであり、心と体の統一によって意味する理解の方向を我々に指し示しているかもしれない。

現在我々は肉体的に生きている。墮落が肉体に直接的に影響を与えなかったのは明白だ。もし我々が提案されたモデルを人間の構造に適用すれば、肉心は肉体と密接に連結している。結果的に、墮落は直接的に心と体の分割という結果にはならなかった。というのは、肉体的生命は肉心と肉身の統一と不可避免的に連結されているからである。局所的な[肉]心はそれが本来的に持っているであろう脳と過程知覚情報と記憶の構造にパターン化される。我々が使う墮落の結果として失われた心とからだの統一を再確立することと連結させられる英語の用語は幾分誤解を起こす。このことは、その言語学の一般的な利用は伝統的な実体の存在論に概念的にむすびつけられているからである。そして我々が見ているものは間違っている。もし墮落が心と体の分立をもたらしたとすれば、提案されたモデルが示唆するように、どこに問題があるのだろうか。

## 5. 愛

原理講論は墮落の必須の結果は愛と関係することを示唆する。神の愛を認知することができず、他人に（神を中心とする）適切な愛を与えることのできないことである。さらに、愛は何か無定型の感情によるものではない。愛というのは特定でき方向性を持つものである。

神から分立された二性の実体が、相対基準を造成して授受作用をすることにより四位基台をつくろうとするとき、それらが神の第三対象として合成一体化するために、主体が対象に授ける情的な力を愛といい、対象が主体に与える情的な力を美という。(参考文献18)

それゆえに神は人間に愛をあたえ、われわれは神に美をかえす。さもなければ我々が神を愛し(時にこれを孝行とよぶ)神は我々に美を返す。愛と美は同じコインの二つの面である。それらは物理粒子の間の関係を保ち確立するために働く物理的な力と類似して考えることのできる感情的な力である。一緒に、私は愛と美を一つの力、人間間の関係を確立し維持するために働く愛、として言及する。

情的な力として、愛は心と関連しなければならない。提案されたモデルのなかで二段階人間構造の内的基台として。そうすると最初の質問は遍在する(生)心からの愛であるのか、それとも局所的な(肉)心とも関係しているかということである。これに確定的な解答を与えるのはそんなに簡単ではない。統一思想は霊と考えられている心の部分のより高次の機構の一部であることを示唆する(上の第3を参照)。それゆえ、遍在した(生)心とだけ関連することを示唆するようである。しかし、われわれがすでに見たように、統一思想で提案されている人間の構造は二つの実在として存在する心と体に頼る。これはここで提案されている構造とは反する。統一思想のこの様相はここで提案されるモデルへの適用への良いガイドではないかもしれない。

その一方で、動物の研究は人間に対して特徴と考えられている共通の思考過程が人間に唯一のことではないことを示した。チンパンジーは本能的ではない学習した文化を持つし、いるかと他のいくつかの動物は自己認識をし、ある鳥は思考力や初歩的数学能力を応用する。これらの研究は人間に唯一の思考過程はなく、こういった能力は我々を動物と区別するための論拠を与えない。これは重要である。というのは原理講論において人間と動物を区別する特徴は動物が個々の霊を持たないことだからである。それゆえに、われわれは局所的な(肉)心をこれらに帰することができる。これらの動物研究は心の全ての機能が肉心において起こることを示し、我々は愛を遍在した(生)心と局所的な(肉)心の両方に帰するべきことを示唆する。

愛はどのように機能するのか? 物理的相互作用を見るとき、それらは物

の間の引力か斥力を発生するために粒子を交換することで媒介される。4つの物理的力でさえ粒子の交換を通して発生する量子論的考えである。これは主体と対象の間の交換を必要とする物理的力から発生する関係である。愛は心の内的基台と関連する。そしてそれは、物質の情報パターン構造と関連する。そのため、本質的に交換される愛の粒子ではあり得ず、心は実体ではない。しかしながら、人間の提案された構造は物質存在によってある意味表現されるであろう愛のように心と身体の分離できない統一体を導く。従って、愛は心の中で始まるように思われ、情的な意志と通信する交換として物理的に表現される。その交換は言葉や、接触、あなたのパートナーに対して何かすること、または贈り物を与えることである。私の妻は花が好きで私が花を彼女に買ってあげると喜ぶ。彼女は、その贈り物とともに愛の意志疎通を理解する。

もし墮落が愛と関係しているならば、墮落が心と体の分離をもたらしたのではなく、生心と肉心の両方と関係する心における破損になったと見ることができる。我々の心は正常には形成されていない。それは神の愛を完全には受けることができず、正しい動機で愛を与えることができない。遍在した（生）心に関してコンピューターの類似性について記述するとき、自己認識コンピュータプログラムとの相似であると言うことができる。そうすると、墮落において、部分的なプログラムが書き換えられ我々は何か反するようなソフトウェアを開発したことになる。その問題は人間の非物質的な部分に主に存在するようであるが、身体の物質粒子と心との統一のために物理的な分岐はあるであろう。

我々は心を物質粒子に重ね合わされた情報の蓄積と回復として説明するとき、局在する（肉）心および遍在した（生）心の両方における愛の破損は肉体的な結果となるであろう。我々の行動の背後にある意志の関係の内容に対してではなく、原理講論が示しているような肉身に対しても。我々の考えは脳の中の分子や荷電粒子の動きに直接影響する。そしてより大きなスケールでは、身体の過程や動きの全てに影響する。意志における闘争を引き起こす心のプログラムの部分的書き換えは部分的に身体の中や身体の中の動きや我々がなすことのパターンを変えるであろう。このように、墮落は我々が行い考える全ての部分に染み渡り、我々の愛の容量の中の闘争は我々の行動と身体の機能における闘争において明白になる。

## 6. 結論

一般的な統一思想観は墮落によって心と体の分裂が起こったことであり、それゆえに霊的な成長の一部として心と体の統一を発展させなければならない。しかしながら、この共通の理解は心と体の二重性と 心が身体に分かれた無形の実体として存在する古典的な哲学的唯心論による実体的な存在論を仮定する。この意味は、言語のキリスト教文化との長い接触から英語の中に植え付けられてきた。しかしながら、この実体の二重性に指示された存在論は自然科学によって間違っていることがしめされ、宇宙の科学的理解と信仰的な考えを表現するために使われた言語との間の認識された闘争という結果になった。

科学と調和するために、必要なことは実体的な伝統的な存在論に依存しない存在論である。これは私の著書の目的の一つである。私はこれが内的基台として性相に対して私が提案するモデルによって表現されていることを信じ、人間の結果として起こる構造をここで議論した。この存在論的モデルは科学を受け入れる関係の見解の変化を導く。しかし神の創造から発生するものとして見ることができる緊急の特性を許す。

そのモデルを統一学説において表現されたように心と体の統一の記述に対して適用するとき、その用語で意味される物を理解することは幾分変更される。墮落の結果はむしろ心と体の分離であったが、人間の心の分離は結果として見られる。心と体はこのモデルの中では根本的に一つの存在であり分離されることはできない。分離されるものは我々の動機であり愛の能力である。しかし、これは存在の統一的性質であるので物理的な結果である。我々心と体の統一を必要としない、しかしむしろ神の愛を受け与える動機や能力の統一を必要とする。

モデルがさらなる発展を必要とするところは局所的（肉）心と遍在した（生）心の間関係の正確な本質を理解する際である。科学において、統一思想/原理講論またはこれを理解するための一般的に信仰的な考えにも先行する物はない。我々の日々の生活は統一的存在として我々がその中に矛盾した動機を持っているにもかかわらず意識を持っていることである。我々の経験は二つの心ではなく一つの意識であるので、その二つの心には大きな違いがなく、むしろある種の連続があり一つの存在のむしろ異なる様相であると考えがちである。より大きな宇宙意識の中に遍在した（生）心をおくことは、個性とともに離れないけれども、幾分その個性の境界をぼやけさせる。このように、より大きな物の一部分であることを経験でき、テレパシーや集合的無意識のユングの概念を理解

する論拠を与えることができるだろう。我々の理解を深めるのに必要なことは心が存在できるようにいかにして情報が物質粒子に構造化されるかに対する知識である。神経科学は肉体的脳に対してこの仕事をちょうど始めたところである。

#### 参考文献

- 1) フィリップ・クレイトン “キリスト教的万有内在神論” Dialog 37 (Summer 1998): 201-208.
- 2) デビッド・ブルトン、物質とは何か：統一思想における根本概念、素粒子物理学と聖書の交替（東京、統一思想研究所、2005）21-23.
- 3) フィリップ・クレイトン “万有内在神論” 201-208.
- 4) フィリップ・クレイトン “万有内在神論” 201-208.
- 5) 李相憲、新版 統一思想要綱（東京：統一思想研究所、2005）34-35.
- 6) 李相憲、新版 統一思想要綱（東京：統一思想研究所、2005）30.
- 7) デビッド・ブルトン、Matter, 43-51.
- 8) 李相憲、新版 統一思想要綱（東京：統一思想研究所、2005）138-139.
- 9) デビッド・ブルトン、“霊とは何か？霊的存在の物理”：第18回統一思想国際シンポジウムの議事録（東京、2006）。
- 10) 認識論の章において統一思想は全ての認識作用が細胞レベルの原意識に由来することを示唆するが、李相憲、新版 統一思想要綱、431-433.
- 11) “熱い話題：芸術的知性” <<http://www.bbc.co.uk/science/hottopics/ai/machines.shtml>> 2007年10月28日アクセス.
- 12) 李相憲、新版 統一思想要綱（東京：統一思想研究所、2005）90.
- 13) 李相憲、新版 統一思想要綱（東京：統一思想研究所、2005）90, 433.
- 14) 原理講論（ソウル、成和社、1996）48.
- 15) 李相憲、新版 統一思想要綱（東京：統一思想研究所、2005）364-365.
- 16) 原理講論（ソウル、成和社、1996）136.
- 17) いくつかの言い伝えは人類が肉体的に不死であり墮落は死を招いたことを示唆する。全ての性的な種の生成は種の個々器官に寿命が制限されているため生物学的にはこれはない。原理講論は制限された肉体的寿命が墮落以前の本来の人間の条件の一部であるとことを示唆する生物学的立場と調和する。
- 18) 原理講論（ソウル、成和社、1996）38.  
（以上ページ数は英語版のもの）